根の研究（Root Reseach）8．67（1999）

報　告

第100回つくば作物根セミナー・根の事典出版合同記念シンポジュウムに参加して

辻　博之
（北海道農業試験場）

去る５月２３日に、つくば市のアルスホールで行われた、第１００回つくば作物根セミナー・根の事典出版合同記念シンポジュウムに参加しました。このシンポジウムは、つくば市やその近隣に勤務する研究者が続けてきた作物根に関するセミナーが１００回目を迎えたことと、多数の根研究会会員が執筆した、根と根圏に関わる諸問題を網羅している根の事典（朝倉書店）が刊行されたことを記念して行われました。前日に同所で行われた、第１１回根研究集会参加者に加え、休日を利用し、近隣の研究者や関心ある人々が参加しました。

シンポジュウムでは農業環境技術研究所の阿江教治氏、千葉大学大学院生の赤坂庸子氏、名古屋大学の巽二郎氏、東京農業大学の山崎耕宇氏による午前２題、午後２題の話題提供の後に総合討論を行いました。

最初の阿江氏によるご講演では、難溶性リン酸の作物による特異的溶解・吸収機構について、キマメの根分泌物質による鉄型リン酸溶解機能、ラッカセイの難溶性リン酸「接触溶解」の機構を中心にお話しいただきました。同氏がフィールドで得た直感を、実証を重ねて証明していく過程には参考となる点が多いご講演でした。次の、赤坂氏のご講演はマメ科植物における *A. rhizogenes* 感染による毛状根の発生と、その培養による形質転換植物体の再分化、毛状根の評価指標を中心としたものでした。また、同氏には若手研究者として、今後の研究の興味と抱負についても語っていただきました。

午後の巽氏のご講演のテーマは、根の研究戦略およびその組織論についてという雄大なもので、根の研究の意義を、根圏に代表される「境界領域」を様々な角度から明らかにしていくことであるとし、組織としては対象、場、手法等が異なる多様な根の研究者とその集団のネットワークを構築していくべきであろうという内容の提言がなされました。山崎耕宇氏には播籠期の根系研究と題して、日本における根系研究史と今後の根研究への期待についてお話しいただきました。

総合討論の前半は座長の大脇良成氏（農研センター）、森田茂紀氏（東京大学）、山内章氏（名古屋大学）のリードのもと、講演に対する質問の他に「根研究の糸口とそこからの発展させかた」といったトピックで論議が展開されました。また、後半は「根研究の今後のあり方」ついて討論され、巽氏の、「多様な研究者がいるというだけでなく、”フィールドの問題の一部として根をとらえている人”や”根は材料に過ぎないという人”と共通の研究テーマを設定することが、異分野との交流や研究の進歩に役立つのではないか」、山崎氏の「異分野や考えの異なる人を積極的に抱き込むことが研究の発展につながるのではないか」というコメントの後、会場からの意見として「現場（農家）の根に対する期待に答えるためにも根研究法の標準化を図り全国的に展開することができないか」、「根の研究会としては根に興味を持つ研究者の集まりというだけでよいのではないか」といった意見が出されました。

私にとっての根と根圏は、フィールドで起こった理解しがたい現象をなんでも投げ込んでおける便利な存在で、後から時々突っついては解釈に都合の良い結論を引き出しているような所がありました。作物根セミナーや根の研究会といった研究者の集まりにその結論を持っていって多様な意見を聞きながら、マイペースで根に取り組んでいるというのが現状です。今回の参加者は私のような立場の者を含め、様々な根に対する考え方をもっている研究者とはいっても、それなりに現状に満足している人が多かったのではないでしょうか。今後、異分野との連携や根研究のあり方について討論していくには、本シンポジュウムの参加者や根研究会員だけで討論するだけでなく、会員以外の意見（期待や不満）を含めて議論していく必要があるかと思います。本誌の中でのそういった意見の連載や、誌上討論も一つの形でしょうし、これまで縁の薄かった学会等で根研究のあり方について提言していくのも有効なやり方ではないか、などと考えながら会場をあとにしました。